

やはり俺がヒーローを
目指すのは間違っていた。
が、

おーり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新年一発目なので初投稿です

と、テンプレ染みた例文でシユウート！

目次

やはり俺がヒーローを目指すのは間違っ ていた。が、	1
登場人物設定	16

やはり俺がヒーローを目指すのは間違っていた。が、

「……やっぱ間違えたかなア……」

強個性なクラスメイトを睥睨して、比企谷八幡の眼差しは見る見る曇って、否腐って往く。

雄英高校1年A組。

将来的に「ヒーロー」を目指す集団なだけはあるはあって、誰も彼もが陽気で自信に溢れている。

つまりは、彼なりにカテゴライズする『陽キャ』の集団。

そんな中に陰キャ、むしろ陰の気が溜まって生まれたと言っても過言では無い己が、
某林原^{白面のモノ}サンにも匹敵する己が居るのは場違い甚だしいのでは。

そんなことを感じてしまう。

「早くも帰りたくなって来たわ」

言葉にせず、八幡は内心で項垂れるように独り言ちた。

あと林原サンは次作でヒロインに転生してっから。同じにすんなや。

「ケロ、八幡ちゃん、見る見る目が腐ってるわ。こうして合格出来ているのだし、もっと自信を持つべきだと思うのだけど」

「……蛙吹か」

「梅雨ちゃんって呼んで。中学まで一緒だったのに、呼んでくれないのは八幡ちゃんだけだわ」

ぱっちりとした目の少女が、気づけば自分の机にぺたりと顔を乗せていた。

付き合いの長さから八幡自身の内心を掌握したのだろうが、しかし、

「……いや無理だって、結局のところ俺ってイレギュラーみたいなモノだもん、個性強い上にキャラとしても腕白な子たちとどう向き合えばいいのかわからないよ……」

「ケロ、何処かの魔剣使いみたいなのを言うくらいなら余裕あるとおもうわ」

両手で顔を覆って、椅子の背凭れに仰け反る八幡は中々に回復し難い心理を備えてい

た。

しかしネタは通じた。

自分もああいうラグナロクみたいな体内チームメイトが引つ憑くタイプの個性ならキャラが負けてないのに、と漫画のキャラを八幡は羨んでいた。

否、憑いたら憑いたで逆らうことも窘められることも無しに身体を乗っ取られて終わりだな、やっぱスタンド系は無い方が良いわ。

と、すぐさま思い直すのだが。

「あと、そうやって同学年のクラスメイトの『悪いところ』を見ないで『わんぱく』で評価できているところ、そういう視点が持てるのなら問題ないと思うわ。手始めに距離の測り方からやってみましょう？ 先ずは梅雨ちゃんって呼んで」

「カウンセラーかよ蛙吹さん……。お前のそういうお姉さんなところ好感持つわ……」
「……不意打ちはズルいわ」

ケロオ……。と無表情ながら微かに赤面している梅雨ちゃんがそっぽを向いた。
可愛い。

だが、そういう肝心なところを八幡は見えていなかった。

見ていたのは、

「机から足を退けたまえ！ キミは何処のチンピラだ!」

「ハアア!?! 俺様に指図すんじやねえよ！ 何処中だ teme ー!?!」

「ダ、ダイジヨウブダイジヨウブ、試験は通つたし個性の馴染みも順調だし、かつちゃんがいるけどこのさき平穩とは言い難いけど生きていける、ダイジヨウブダイジヨウブ……!」

そんな面々。

やっぱり個性強い（確信）。

「……あ。蛙吹、やっぱり俺なんかかなりそうだわ」

「いきなり自信回復したわね。どうしたの」

自分寄りの陰キヤを見つけて、球磨川禊を見て安堵したマイナス13組の精神に倣っただけである。

下には下が居る。

ガタガタ震えながら教室入り口で躊躇するモジャ髪の少女を見て、そう判断した八幡であった。

失礼にも程がある。

ちなみに。

少女を見てそんなことを口走ったお蔭で、すわ一目惚れか、と勘違いを展開させつつも口には出さないで心にそっと仕舞い込んでいる異形系個性の少女が目の前に居たりしたのだが、そんな内心には終ぞ気づかぬままである。



「嘘やん」

モジャ髪の少女が、バクゴーという発破系男子を大きく凌駕する記録を打ち出した。

ジャージの上からでも分かる程度に体格も確かにあるので記録が伸びることは測れたが、如何にもな強個性の発露。

記録最下位は退学、との訓告を受けて、手加減しながらでもこの調子なら、と舐めかかっていた八幡は一気に最下位へ下落していた。

「ま、未だ……、やれます……ッ！」

なんだか少年漫画のワンシーンのように印象強い眼差しをしていたが、脱落の気配をすぐ後ろに感じ始めた八幡にとっては背筋の凍る感触。

自然と、何処かの雪女系個性少女を思い出していた。

『デクウー！?! テメエなんだその個性はアアア!?!』

「……次、比企谷」

「ヒエツ」

指名され、及び腰になっていた八幡は変な声が出た。

ひとり男子が荒ぶったりして少女に絡みかけているが、如何にもチンピラなその有様は他の生徒らによって抑え込まれて黙殺されている。

ので、相澤先生は気にせず、『最後のひとり』を指摘していた。

モジャ髪の自爆少女、緑谷イズクが明かした消失ヒーロー『イレイザーヘッド』。

かつてそう呼ばれた相澤消太は合理的な人間だ。

それは、英雄高校の教師として赴任してからも、その性質に翳りが生まれたことなどない。

一撃撃つたら行動不能に陥る個性なんて、ヒーローとして欠陥的にも程がある。

上手く結果を残せなければ、今までに除籍退学に追い込んだ孵ら（すことに適）せなかった『生徒』^卵同様、彼女を退学させることも考慮していた。

しかし、彼女は結果を残し。

その上、この程度で諦めて堪るか、という『火』を点けたのだ。

他にもない、それを見ていた、生徒^{仲間}たちに。

それは、ヒーローにとっては必要な、もう一つの絶対条件。

『諦めない心』。

前を指して、数多くの人々に希望を与えられる『引き上げられる心理^カ的^リ奮^ス起^マ』。謂わば、精神的なカンフルだ。

だからこそ。

それに『引き上げられなかった』生徒は、きつちりと後備を測るべきだと、そう見定めたのだ。

「お前、本気出して無いだろ。やる気がないなら、この後、帰っても良いぞ」
「……それそのまま退学コースじゃないっすか……。いいよ、やるよ、やってやるともさ
……」

全く覇気のない貌で、比企谷八幡は前へと進んだ。
もつと意気込み見せろ、プルスウルトラが校訓だぞ。



一身上の都合により、比企谷八幡はヒーローを目指す。
それは、何も雄英高校ではなくとも達成できるだろう目標だ。
しかし、彼は此処に居て、この道を歩むと決めたのだ。

『——八幡、お前、ヒーローに向いてるぞ。目指して視ろ、次はお前の順番だ』

そう言って、『この学校』を奨めたのが他でもない『彼女』だ。

あのひとは自分を助けてくれて、自分の為を思つて此処へと導いてくれた。

背中を、押ししてくれた。

ならば、応えなければ。

そうしなければ、その一步すら踏み出せない、八幡は己にそう課したのだ。

だから――、

「……スロウスターターなのが嫌になるね、全力だろ……、出せばいいんだろ、出せばよオ……！」

煽られている、と。

それが自分の為なのだ、と。

それを見透かしながらも、八幡は前へと進むことを、

――自らを曝け出すことを、決めた。

「変、身ツツツ!!!」

換わる。

地球の歴史の『一部』を一種の生体情報^Dまたはウイルスのような性質へ集約し変換^Aす

る『個性』、通称『ヒストリー』によって合成された強制個性付与薬剤【ガイアメモリ】。一度投与すれば肉体は変貌し、生来本人が備えていなかった別の個性へと進化することが可能となる薬剤である。

それらはかつてある都市を中心に高値で取引されており、八幡はその一つを中身を知らずに使用してしまった。

その結果は、かつて僅かながらに持っていた弱個性、自身が『ヒキガエル』と仮定していた『それ』との変異的な融合を果たしてしまい、——失敗。

見るも無残なキメラが誕生し、其処から元に戻ることはおろか、普通の生活を送ることも難しいと判断された。

誰もが匙を投げた、そんな中、可能性を見出した集団が居た。

それが、【錬金戦団】。

個性を強化、または抑制することによって人々を助け、果ては人類の進化を目指すという科学者の集団である。

一年に及ぶ治験、否、実験の果てに。

八幡の個性は強化され、八幡自身も強くなった。だが、

『ゴ、あ、アアアアアアアアアアア!!』

全力を出すためには、そうなった経緯である複合異形系へと変貌する必要がある。

本来ならばそうカテゴライズされる個性は、日頃からその身体に特徴が浮き彫りとなり、そういう形を換えることは無い。

だが八幡は人の世に馴染むために、普段からある強化素材の力を借りることにより、己を抑制して『変貌』を強いている。

変貌するたびに彼の身体は膨張し、それを抑制する強化素材によって合成した決して破裂することの無い防護服の内側で行き場が亡くなった肉体の一部が壊死し、破壊と再生を幾度となく繰り返すのだ。

錬金戦団の齎した結果は、確かに成功と言えた。

強化素材——、かつて歴史の陰に埋もれていた【賢者の石】と同等とされる【核鉄】と呼ばれる『それ』を扱う技術【武装錬金】によって、八幡の身体は漸くの結束を収めたのである。

しかし、

——そもそもが、【ガイアメモリ】の精製と拡散を促したのは、件の錬金戦団であった。

正しくはその中の『ある一派』の独断で行われた、大々的な実験の下準備であったのだ。

戦団の大元は、それを把握したからこそ八幡のような『被害者』をいち早く見つけ出し、個性制御実験の一環として治験に採用することが可能であった。

その事実を知り、錬金戦団から脱した一団がいる。

それが、八幡が今も所属しているヴイジランテ集団、【モンスター軍団】である。

『変身……完了ッ！』

漆黒のライダースーツに見える全身武装に自らを押し込めて、膨張と圧縮と全筋肉神経の超硬化を果たした彼は前を臨む。

怪物の名を課せられようと、自分たちはヒーローを目指すのだと。



一時国際指名手配にまで至った複合個性集団、それが【モンスター軍団】である。

鍊金戦団から独立したそもその原因は、彼らが執り行っていた『実験』の被害者が多数を占めていたため。

当初は鍊金戦団自体が犯罪集団などではなく、その技術力で以てして世に平和を齎し貧困を駆逐しようという利他的な、戦闘配備なども碌に無い科学者の組織であったことが悪名の一助となつてしまつていた。

彼らは自身でその名を背負つた。

怪物と、呼ぶならばそれでよし、と。

その大多数の『見た目』も相俟つて、世界中のヒーローたちがかつての巨悪を打ち倒すが如くに彼らを追い立てた。

其処に大きく抵抗を見せたこともまた、名乗りの一端であろう。

鍊金戦団の良識派が自らの行いを明け透けにし、罪を認めたことによつて彼らへの手配やヘイトは収束したが、其処に至るまでの被害は、お互いに目を覆いたくなるような結果を残してくれた。

『モンスター軍団第8位、【毒竜・アジダハーカ】。戦いは好きじゃねえが、負ける気もさ
らさくらねえ』

比企谷は、そんな自分の『所属』を明らかにしたうえで、今年の雄英受験に赴いていた。

当然、相澤も彼のことを把握している。

そういうビッグネームを背負うのならば、その上でヒーローを目指すのならば、決して甘いことは吐かせやしない。

黒いライダースーツのような恰好に覆われて、それが八幡の鋼のような肉体を晒すように主張する。

体格は変身前と然程変わっていないはずだが、その『変化』に何かしらの強靱化が行われたのは明らかだろう。

個性をアシストする道具の使用は、身体測定という名目上は本来禁止されるのだが、彼に関しては『一回のみ』の許可を相澤が事前に下ろしていた。

『往くぜ』

遠投用のボールを手にする腕に、血管のような筋が迸るように張り巡る。

そのまま大きく振りかぶり、その状態での全力を、彼は示した――。

—ポスン

「……………」

『……………』

「……………」

結果は——50センチ。

すっぽ抜けたボールは、八幡の手元に力無く堕ちていた。

「…………お前、退学な」

『お待ちください相澤先生ツツ!!?』

登場人物設定

・比企谷八幡

主人公

個性【ヒキガエル】↓【毒竜】

いわゆるひとつのH A T C H I M A N な八幡。腐り目でポツチで陰キャでヒーローとは正反対だが、熱いときには熱いし心に決めた大事なことは譲らない。ある人物に助けられ、背中を押されてヒーローを目指す

正しくは『体表に微弱な毒腺がある』という爆豪母の真逆みたいな弱個性だった。本人には成長の段階で耐性が付いたが、成長環境の過程で精神性拗らせたお蔭で目が腐り、沼底から見上げるカエルみたいな眼差しが相俟って個性名を勝手に呼ばれ続けて、本人も自棄になってそのままを通す。（名前を間違われても揶揄われても特に修正を突かなかつた、原作の『彼』に準ずる）

注入された【ガイアメモリ】は『C o c k r o a c h（油虫）』。キチン質の筋繊維を同時に併せ持ったために、『毒腺』の個性と突然変異的な変容を果たして『怪物』へ変わる。変形異形型とも呼べる『変身』タイプの個性

実際は変身を解除することで本来の筋力量と再生力と毒流出のテリブルなキメラへ変ずるのだが、そつちを『真実』だと明かすにはちよつと…という本人の願いから掛け声を決めている。『変身』後の姿は『真つ黒な龍騎』が一番近い。オイ、クロスオーバーからいきなり外れたぞ

初話締めではすっぱ抜けたので記録がブービー。本来はガチで戦闘力がヤバイのだが、本人が言う通りに（爆豪以上の）スロースターターなので体が温まって無いと動きが鈍い。実験に際してどっかで爬虫類系の個性も混じらせられた可能性がある（悲

モンスター軍団序列8位。序列が10人居る怪物系ヴィジランテ集団という『軍団』の一角なので普通に強い。毒を希釈して薬を造るくらいの緊急医療系にも経験があるので、被災地なんかではかなり役立つ

・TS緑谷

原作主人公

個性【無個性】↓【ワン・フォー・オール】

集英社の花菱烈火。直接受け取ったオールマイト（八木俊典）の個性と見受けられるパワーを溜めてSMASHさせるモノだけじゃなく、歴代の所有者たちの個性まで扱い始めたのでまさにコレ。個人個人の体質的なモノだったはずなのにコレで自在に引き

出せるようになったら本当に個性ってなんなん？と疑問符が、いやまあ既に浮いてるんだけど

何の因果かこの世界線では女体化、むしろ女性化。無個性ではあるが女子を虐めていたとかサイテーだな爆豪

ワン・フォー・オールを引き継ぐためにめがっさ鍛え、その肉体は結構ムツチリしている。半年のマッスルな成果で乳がデカイ。脂肪？ いいえ、胸筋です

・蛙吹梅雨。梅雨ちゃんと呼んで

ヒロインやも知れぬ

個性〔カエル〕

C V：悠木碧

中学時代、原作では個性のために中々友達が出来なかったのだが、それ以上にアレなキャラである八幡が居たのでむしろ良い方向に緩和してそこそこ出来たらしい。やつたね梅雨ちゃん！

雄英に進学した同中というのもあるが、八幡の人柄をうつすらと把握し悪人だとは思っていない。むしろかなりの善人寄りだと伺っているので、友人になりたいムーヴが加速する。いいぞ、どんどんイケ

無表情キャラだが照れると『鳴く』。カワイイ

・青山

居るよ、キチンと居るよ！

・モンスター軍団

錬金戦団から派生した怪物系ヴィジランテ集団
以下、10位から。チエーケラア！

・モンスター軍団序列10位

【メデューサ・市松】

個性【こけしロソリネス生成】& 【メデューサ】

元は『こけし』を造るだけの弱個性。ガイアメモリ『G o r g o n』で『石化視線』の個性が発現した少女。和服少女で目元が隈で真っ黒い。夢喰いメリーのイチマでイメージ

・モンスター軍団序列9位

【迷宮造設師・ダイダロス】

個性【改造】&【ラビリンス】

機械の覆面で姿を隠し続ける大柄なオカマ。ガイアメモリ『Labyrinth』で『亜空間作成』の個性を得る。尚、序列は純粹に実力勝負で決定した

・モンスター軍団序列7位

【銀断のロキ】

個性【銀紙操作】

折り紙の銀紙のみを操れる。但し折った成果は実現できるので、バランスがメチャクソぶつ壊れた個性。紙鉄砲では街一つを衝撃で吹き飛ばし、紙飛行機ではジェット噴流で太平洋も横断できる。ナニコノブツコワレROD

メモリ無しで立場に立ったナイスガイ。弱い奴の味方だ！ と戦団から外れた。見た目は銀髪ロンゲのチャライニイチヤンだが、女性にはデレッツデレに甘い。よくナンパに繰り出すのだが、勝率が…（哀。実力勝負では八幡とは僅差。こちらはギリで勝ち越し